

## 1年次の実践研究の成果と課題

研究委員長 鈴木 聡

重点 子どもの中に、自己の学びを見つめる「ものさし」を生み出す手立て

### 1 成果

#### ①自己の学びを見つめ直す規準の自覚を促す支援

##### ・困ったことや捉えが揺らいだことを表出する場面の設定

例えば、国語科の「どんな言葉で書けば家の人に伝わるのかな」、音楽科の「曲の盛り上がりがうまく表現できていない」など、困ったことや捉えが揺らいだことを表出する場面を設定することによって、活動の目的意識を高める姿が見られた。

##### ・共通点や相違点、多角的な考察を踏まえ、自分の解釈を説明する活動の設定

例えば、社会科の「人が住んでいるところに公共施設はあり、人が多く住んでいるところに大きな公共施設がある」、家庭科の「快適に過ごすための着方には吸湿性や吸水性、通気性などの要素が必要だ」、道徳科の「ピシラスとデモン二人の考えは違うかもしれないけれど、互いを大事に思う気持ちは変わらない」など、「対話」を通して考察したことを踏まえて、自分の解釈を説明する活動を設定することによって、物事を捉えるための新たな視点を獲得する姿が見られた。



##### ・目標に照らした到達度や達成度の根拠を具体化するしかけ

例えば、生活科の「〇〇はできているけれど、△△にはなっていないから80点」、音楽科の「自分たちの表現に足りないことが分かった」など、目標に照らした到達度や達成度の根拠を具体化するしかけをすることによって、自分の学びを分析的に見つめる姿が見られた。

##### ・仲間をモデルとしたり、フィードバックを得たりする場の設定

例えば、図画工作科の「友達のように折る回数を増やして折るときれいな形になるんだ」、体育科の「友達のようにもっとお尻を遠くについたらスピードが上がるのかな」など、仲間をモデルとしたり、フィードバックを得たりする場を設定することによって、必然性をもって自分の学びを見つめ直す姿が見られた。



#### ②見通しをもちながらよりよく問題解決する活動を位置付けた学習過程

##### ・問題解決の最適解を追究する活動の設定

例えば、算数科の「どの方法でもよいのではなく、早く簡単に計算できないといけない」、理科の「土の量をそろえないと、粒の大きさと水のしみ込み方が変わるかどうか分からない」、音楽科の「曲の感じと一緒に自分たちの思いを工夫して音楽にのせて表現したい」など、見通しをもちながら最適解を追究していく姿が見られた。

##### ・個の学びと協働的な学びの往還や「選ぶ→試す→修正する」活動が複数回設定された学習過程

例えば、国語科の「例えやオノマトペなどを使うとよりよく表現できることが分かったから、自分の文章を見直してみよう」、社会科の「秋田市全体と駅の近くを比べて、同じところだけではなく、違うところについても説明してみよう」など、よりよい問題解決のために思考し直す姿。音楽科の「強弱をつけて歌ったことでサビの盛り上がりを表現できた」、体育科の「強くマットを押してみたら、立ち上がった」など、個の学びと協働的な学びの往還や「選ぶ→試す→修正する」活動を複数回設定することによって、よりよい問題解決が図られたことを実感する姿が見られた。



### 2 課題

#### 協働的な学びで生み出した「学びのものさし」を基に、自ら学びを深めていくための手立て

1年次の実践研究をと通して、必然性をもって自分の学びを見つめ直す姿や、よりよい問題解決のための規準やイメージをもちながら学びを進める姿が見られた。しかし、協働的な学びで生み出した「学びのものさし」を基に、自ら学びを修正し、深めていくことが課題となった。そこで、2年次は学びの過程で生み出した「学びのものさし」を働かせながら、学習者が自ら学びを深めていくための手立てを具体化していく。